

新刊紹介

漢巴四部四阿含互照錄

赤沼 智善著

本書は表題によつて明らかなる如く漢譯四阿含と巴利文四部との相互相對を爲せるものである。かゝる企ては久しい前、既に姉崎正治氏によつて企てられてゐるが、今日その書の入手したいことゝ、そこでは巴利學一部より漢譯への對照表が缺けてゐることゝによつて、著者が序文中にいふ如く「今漢巴巴漢兩方を纏めて出版するのも、一に斯學の研究者の便宜といふ點からのみ」なされたものである。而して實に本書の出版の意義は此の點にのみかゝつており、且又此の點のみにて本書は充分なるレゾン・デールを有すると思ふ。著者は序文の中で懷舊的感傷にひたりつゝ此の書原稿製作當時のセイロン時代をなつかしんでゐるが、著者のセイロン時代の成果は先著『阿含の佛教』と本書とに於いて充分に豊かなる實りとなつてあらはれたわけである。

さて本書の内容は四篇に分たれ、第一篇は漢巴四阿含四部の對照表、第二篇は巴漢四部四阿含の對照表、第三篇は附録として一別譯離阿含經、二雜阿含經、三七處三觀經、四梵文阿含經五西藏譯四阿含關係經典を含み、第四篇は補遺として正誤を含み、主として偈頌の對照を爲してゐる。此等の中勿論第一篇及び第二篇が主要部分にして、全部四二四頁中、三四二頁を占む

る。尙第四篇の補遺が本文中に組込まれてゐたならば一層便利であらうが、本書の如き極めて面倒なる組方のものに於いてこれだけの鮮明なる印刷とこれだけの正確なる組方とを得たことを喜びて、その僅かなる不便を許すべきではなからうか。

本書はその性質上極めて狭い範圍の讀者をのみ見出すらしく考へられるが、實は極めて廣く世界中の佛教學界に迎へられる筈である。何故なれば阿含研究は佛教學を正しく學ぶものゝ必らず踏むべき第一歩であり、又他面、大正藏經の出版等によつて漢譯經典が世界の佛教學者の手に普及して漢譯の重要性を認めしめたからである。従つて本書に於いて一つの缺患が見出される。即ち序及び凡例が和文のみによつて書かれてゐることである。出来ることならば英文の序及び凡例が附加されてありたいと思ふ。此れは本書の價値を世界的ならしめるといふ點に於いては必要事であらう。

とにかく本書の出版は變態的な日本出版界への一つの曉鐘であり、且又本書の出版に就いて東京の某佛教書出版社が一旦引受けつゝも採算の關係上遂行し得ざりしに反して名古屋に於いて印刷出版すべてを遂行して學界に示したことは、何物かを暗示するものではなからうか。(菊判全一冊、十六十四百二十四頁昭和四年九月、名古屋破屋閣書房出版、定價六圓參拾錢)(龍山)

我 觀 眞 宗 文學博士 村上 專精著

著者は本書の執筆心狀を凝然の維摩經菴羅記の奥書に記せる凝然の狀態に比してゐるより、見ると餘程當時の眞宗學徒への憤

發が大であり、それだけ得意の著作らしい。其動機は二つある。一、金子氏の著「淨土の觀念」「如來及淨土觀念」の所論が宗義に背反するものなれど、己が論駁。二、先に出す佛教統一論第五篇「實踐論」なる名稱が書房の勝手に附せる名にして自己の意に得ざるものがあつたので、其念が動いて本書をして發刊せしめた。即ち本書の第九、十章教團の由來の二章がそれである。これは「我觀眞宗」の内容としては蛇足といふ感がないでもないで、著者は道元と親鸞との一見の「無關係は表面的で反面的に聖人親鸞をよく説明するものは道元その人であり、随つて又淨土宗を能く面裏に於て説明するものは曹洞宗である」からこの二者を比較して歴史的に眞宗の教團成立の濫觴を想察する資料とするものであると辯明して「實踐論」の材料を全部そのまゝ本書に提供してゐる。然し何んといつて第一原因は金子氏の所説反駁の爲めであらう、それは第二章に「我觀眞宗」は金子君の所説と相容れずとして前掲の二書より自己の所説と反對なる處——計四文——を擧げてゐるからでも、又「我觀」の二字を本書の書名に冠してゐるのでも知られる。然るに金子氏の所説への反對として、一、凡そ宗教を研究せんとするに就き忘るべからざるは歴史思想である。然るに金子君は之を閑却に附せられしは頗る遺憾である。二、淨土眞宗を研究せんとするに就き忘るべからざるものは教相である。然るに金子君は之を閑却に附せられしは遺憾である。といふ二ヶ條のみを以て、金子氏の所説に反對してこの二ヶ條以外に金子氏の所論に就て何處が歴史的な研究を閑却にし何處が教相研究を無視せるかは觸れずに唯我獨

尊的である。若し本書が博士の先著「眞宗の眞面目は那邊に存するや」の豫想外の不評判を補ふのが本書の意途であるならば吾人は甚だ遺憾といはざるを得ない。又随つてこゝでは道元と親鸞との比較研究は蛇足に近きものとなり、寧ろ略述か暗記の失か知らないがそこらを補つた方が本書の題目に相應しいものであつたらう。然しながら如上の總ては唯動機でこの動機によつて教理的に、教團的に眞宗教成立の根本を明かにし、更に又進んで既成眞宗に就き本典論、本願論、念佛論、身土論、往生論、眞宗道德等を敘述したものと思ればすべては緩和せられたほどの目障りにもならない。目次は豊富に羅列してあるが一讀後、眞土論と往生論とが目立つ。今は其内容を簡結に紹介するに止めやう。初め眞土論に於ては淨土教にては佛身佛土は難問題で親鸞聖人のこが觀念は佛身も佛土も形式上の名に差別あるばかりで實は別つものではない。これは「眞佛土卷」と出ずる所以、本卷に涅槃經を引く意より明かで、道元が「光明」の卷を著し、弟子懷獎が「光明藏」を作つたのと考へは同一である。而して更に覺存二師も宗祖の見解を踏襲した人で決定的に教相を忘れなかつた人である。これによつて著者は結論に達していふ宗祖、道元、懷獎は假令實際はさうであつても教相に於ては天地もたゞならぬ相違である。「阿彌陀如來は歴史上の人物でないから身土の有無は唯是宗門の教相によるべき」で、もとは娑婆即寂光土と西方極樂の説も同一で改邪鈔に示す凡聖同一も凡夫と光壽二無量の佛身とは同體なることを示すものである。かく娑婆即寂光土も西方極樂説も同一で教相の異りであつて見れ

ば次に問題となることは往生といふことでなくてはならない。故に次往生論に於て曇鸞、道綽、親鸞、覺如、存覺の往生觀を述べ、これらを綜合して眞宗所説の往生は二重の命終に二重の往生ありと謂て然るべきであると。心の命終と同時に得る即得往生とは正定聚不退轉の身となり精神の不動となつたもので又身の命終と同時に得るところの往生も捨此往彼の意味ではなく大覺の意味で「眞宗の所謂往生は婆娑即寂光土の覺りと何ら相違するものでない。たゞ淨土門の教相として西方往生を用ひたばかりである」と結論してゐる。扉の文字は宗祖の眞筆の中より拾ひ出したものであり、菊版洋裝六三二頁で定價金四圓參拾錢で少々高すぎるかもしれないが此種の本としては不得止、心棒しなくてはならない。(金港堂書籍株式會社)〔章二〕

An Introduction to Sociology. By Wilson

D. Wallis.

Now York. 1927. pp. XV+433.

本書は人類學的心理學的立場よりせる社會の記述的説明であつて、すべて四部三十七章より成る。

第一部は四章に分れ、原始社會に於ける社會生活及び東洋、ギリシヤ、ローマ、西歐各團體に於ける社會生活を記述し、第二部四章は諸社會學説の要約である。次に第三部に於いては社會生活に影響を及ぼす外的要素を、第四部に於いては集團生活に影響を及ぼす心理學的要素を論じてゐる。第五部は家族、宗教、教育、新聞、政治、法律、産業組織、貧困、心的缺陷、犯

罪、民族問題、移民及び人々に關する各章を以つて現代社會の方向及び問題を論議し、最後に第六部六章に於いては社會發達の趨勢を指示してゐる。而して以上六部に亘る議論の中、吾々にとつて最も興味あるところのものは、第四部のそれであらう。第四部は八章に分れてゐる。こゝでは著者は心理學と社會學との密接なる關係を説き、心理學を社會生活の理解に基礎的なものとして認めんとするのであつて、事實彼は、社會團體に於ける人間行動及び團體活動の研究としての彼の社會學の定義に於いて、社會學と社會心理學とを殆んど同一視してゐる。それ故に單に個人の心的相互關係のみを強調するところの社會の説明は著者の極力相容れざるところであつて、先づ第十三章「社會と個人」に於いて、團體に於ける個人の地位はこれを看過せざるも「團體と個人とは相互に影響し相互に依屬する」兩者は「個人心意の特質及び社會刺戟のそれを決定せんとするに際し是非考慮されねばならぬところの二つの相互補足的要素」として認めらるべきであると論じ、而して同様な理由に立ちて、次章に入り、マクスバール氏によつて取扱はるゝが如き本能は確實性の疑はしきものなるのみならず、社會心理學に於いては無益なものであると云ふ態度をとり「吾々は團體生活に於ける人間行動を説明するに本能を必要としない、けだし團體生活そのものが所謂本能の説明であるからである。行爲の特殊なる形式の最初の動機は、團體内にあり個人内にあるものに非ず」と論じてゐる。

次に著者は又「團體はその構の要素たる個人を超越するとこ

るの現實態でなく單に個人の總計に過ぎない、従つて團體を形成する個人の心理學より以外に團體心理學はあり得ない」と云ふ見方を排撃して、個人心理學は團體と團體との相違をよく説明するものに非ずと論斷し、更に又ルボン、コンウェイとは異りて群集及び群集心理學と集團及び集團心理學とを區別すべきを主張し、こゝにも亦個人心理學は充分群集内に於ける個人の行動を知り得ないと繰返してゐる。

次に團體生活の能産所産としての言語、習慣及び歴史、傳統、意見の團體生活に及ぼす影響に就いて一々論及したる後第五部の議論に入つてゐる。

本書は人類學的・心理學的立場より記述を進めたる點に於いて一般好學者に資する處多いであらう。議論も穩當である。が然し多少極端に走る嫌のある點もないではない。例へば著者の本能の取扱方の如き、今一々それを指適する違なきも、少なからぬ難點を含むものと思はれる。然しながら本書中にあげられたる著者の豊富なる人類學的智識よりせる多くの有益なる例證はかゝる難點を相殺して餘りあるものであらう。〔福井〕

The Social Basis of Consciousness. By

Trigant Burrow.

New York. 1927. pp. XVII+256.

本書は、フロイドの精神分析學を長年研究せる結果、フロイドの心理學の人格的基礎を以つてしては本質的に無意識なところの人格的不調和を意識的とならしむるには不充分的なる事を

見出し、神經性疾患を個人的現象と見るよりは寧ろ社會的に見る事によつて、心的又は神經的不調和の問題に新しき解釋を齎らさんとするものである。然しながら本書は、フロイドの學說に反旗を掲ぐるものではない。フロイドの無意識の學說に敵對的排除をなす事を表はすものに非ずして、我々の立場は、無意識のより廣き包括を、意識の社會的概念の基礎に立てる無意識のより包含的な解釋と余が感ずるところのものに於いて具體化せんとするのである。故に本書は、人間の本質的意識に就いて現今の多様な精神分析の體系に於いて具體化せられてゐる無意識の原型を通じて達成せられてゐると見られてゐるよりも、より適當なる概念を與へんとする試みである。現在の人格的體係の意味に於いて分析と我々と呼んでゐるものは、正しく一つの暗示の方法の應用に過ぎない、而して又我々分析者にとつては他者の場合もさうであらうが、この方法は、暗示的過程を受けてゐる無意識的被験者と同様に實驗者の我々も同じく暗示的過程に無意識に欺かれてゐると云ふ状態を含んでゐる。事を知つた著者は、自己の感ずるところが本書の内容をなすに至つた方向を一つのエピソードで説明してゐる。そは氏が助手を相手に助手の夢を分析してゐたが、或る時助手が氏の分析的態度の忠實性に疑をかけた。そこで氏は慰み氣分ではあつたが助手と位置を轉換して氏が試験臺となつた、最初はさうでもなかつたが次第にこの自任的分析者に對して抵抗を強く感じ且自己の劣弱感を生じて來た。一方分析者となれる助手にあつては彼が初めから欲したものは只實驗者としての優越感であつた。そこで

「個別的分析の適用に於いては、精神分析者の態度と權威者のそれとは不可分のものである」と云ふ結論が正當化せられた。氏が精神分析に於ける人格的批判の一面的にして有限なる事を知つた時、氏の抵抗と個人的自己辯護は減じて來た。同時に助手も亦人格性と抵抗が彼の反動を無意識裡に左右してゐた事を知つた。これからして氏の研究方針は全く一變して、其後分析は相互に努力して自己に於ける權威主義の態度と他に對する獨裁主義を認むる事になつた。著者が新見地を持つに至つたに就いては、この偶然事がかなりあづかることがある。精神分析にかく異なる洞察を加ふるに至つて六年間個人的分析の不可信性に關して社會的實驗をなした後、氏は集團分析の方法を發達せしむる結果を來した。かくて意識の社會的概念の基礎に立つて無意識を、より廣く、より適當に解釋すべき必要を説くに至つたのである。

又氏によれば、我々は主觀的な諸經驗を客觀的に取扱はんとする。我々の感情に就いての智識は單に屬性的である。而してそれは必然的に我々をして感情自體を、よりよく知らしむるものではない。感情は本質的であり生理學的である。我々はその諸屬性を觀察する事によつて感情自體を知る事は出來ない。本書の基礎となるは、正しく感情に就いての知識を通じ產出せられた意識の状態と感情自體なる意識の状態、即ち註解的な心的状態と機能的な心的状態との分離の不可能なる事の認識である。この區別認識に失敗せる事が、現在の精神分析學的方法の不可能性を説明してゐる。

又フロイドの精神分析に於いて個人に認めらるゝ抑壓は、有機體の外に位する先行的原因の結果である。而してそれは集合的種族的無意識の内の抑壓より成り立つてゐる。無意識はかくて個人的よりもむしろ社會的とみなされ、集合的無意識は先在的要因である。

要約すれば本書は、フロイドを目標として精神分析學者の自己分析の不完全なる事を論じ、著者の集團精神分析を主張するものである。〔福井〕

An Approach to the psychology of Religion.

C. F. Flower. N. Y. 1927.

本書の主眼點は凡ゆる宗教が其の共通特徴として個人的統制を超越ると感ぜらるゝ状態の下にあつて、阻絶の經驗を有することを示さんとするにある。著者は此の主張を初めの二章（宗教とは何ぞや、宗教的反應の機構）に於いて論じ、其の説を、ウインニバゴ、インデアンの宗教の如き現存の原始的カルトと對照して近代の諸宗教に適應してゐる。こゝで我々の注意を惹くのは從來の宗教本能説に反對して著者が宗教は單一の本能でもなく又一團の本能に基礎せる情操でもない、其は環境に於ける奇異なる要素の現前、換言すれば「生具的諸傾向にとつて適當なる刺激となるものよりも以上の或るものを識別することが出来る状態（*readiness*）によつて有機體の有する凡ゆる本能及び特殊の反應機構が阻絶せらるゝ事と知る時生起する態度である」と進化的心理學より宗教的態度の定義に向つてゐることである。

尙注意深く心理經驗としての宗教の合理的分析を爲し、宗教の心理的性質に關して一學説を立て、宗教は本能的反應の出來ざる程に識別力の發達する所より結果すると云ふ。此の故に本能的段階にあつては、宗教の如きものはない。と云ふのは、環境の如何なる識別せられたる特性に對しても之に應じて完全に且適當に反應をなす機構があるからである。然しながら行動が自由に發達するにつれて事情は變つて来る。有機體は漠然ながらも環境に於ける複雑性を識別する、そうして後にいたつて充分に之に順應してゆく事になる、斯く、より大なる環境的内容、漠たる「彼岸」を、未だ之と自己が同化はせざれども、これについて種々なる内省を伴ひつゝ、行動的に認識する事が宗教の本質であるとする。著者は之々以つて、オットー教授の指摘せる所の宗教の基礎たるヌミノーのあの普遍的にして無比なる經驗の心理學的説明を考えてゐる。然しながらフラワー氏は、オットー教授が宗教經驗は單に與えられたる經驗的究極性のものであつて如何なる方法を以つてするも分析し能はざるものとする即ちヌミノー經驗の非合理性を認むるのとは意見を異にしてゐる。著者は、自由に行動を爲し得る有機體の心理的成長を伴ふ所の、環境に於ける「彼岸」的要素の漠たる識別より生起するが如き斯かる經驗の發生的の説明は、宗教經驗の問題にある必然的な解決の光を投ずるものと信じてゐる。程度の問題とは云へ強弩は遠きを射る。如何に此の非合理性の領域に著者の科學的メスが振はれるかは今後の見ものであらう。

第三章以下には同朋宗の開祖フオックスの宗教經驗を説き、

新刊紹介

回心經驗の顯著なる特徴のあるものを組織の現象となし且、最も屢起り来る「第一義的宗教的反應」の特殊の例となしてゐる。著者は又ユンクやマーチン等の意見を批判して不當に宗教を侮蔑するものとしてゐる。而して宗教は單に、不快なる現實よりの逃避ではなく現實生命に覆ひかゝる神祕に直面する大膽なる試みであり、率先的、開拓的な態度であり、敗挫をもつて逼る現實について建設を爲すものであるとなし、不確實に對する防禦的反應(D.f.)とか現實よりの逃避(D.co.)なりと宗教が記さるゝ時はすでに宗教が第二義的のものに墮し頽廢せるものであると論じてゐる。

著者の「彼岸」の感情の分析は未だ徹底せるものとは云へない。わづか二章五十七頁にかゝる至難な問題を取扱つて三章以下には、其の發展を見せず只管に著者の設けた假説を實證的に試みんとしてゐるが、このことが著者に對して不滿の感を懷かしめ同時に又信憑の度を減ぜしむる氣味がある。さは云へ概して氏の分析には深く鋭きものがある。近來此の種の出版の雨後筈式に續出する中にあつて本書の如きは正しく光彩を放つてゐるものと云えやう。(横川)

Was Jesus Influenced by Buddhism? Dwight

Goddard,

Thetford Vermont. U. S. A. 1927.

著者は原始佛教に多大の興味を有してゐる研究者である。本書に於いては、氏はゴータマとキリストの生涯及び思想の比較

研究をなし、基督の思想及び行動がゴータマの教義に類似してゐる點の多いことを示してゐる。然しながら史的確證を擧げ得てはゐない。原始佛教が基督に影響を及ぼしてゐると云ふことを其の生活圏内の事實に於ける類似によつて論證せんとしてゐるのであつて其の可能たる論據として阿育王が紀元前第二世紀に埃及及び小亞細亞に佛教の傳道使を派してゐる點を擧げてゐる。事の實否は綿密周到なる史的研究を待たねば急かに論斷し難いが、それはとにかくとして著者は、基督教の發達に關して注意深い研究をなし且又原始佛教について深い理解を有してゐる事が知られる。一讀に價する良書である。(因に氏は先年まで日本に滞在、相國寺に禪を修す、本書は河口慧海氏に捧げた形となつてゐる)〔横川〕

Probleme de Psychologie et de Morale:

E. Rignano Paris. 1928.

本書は心理學的問題の論文集である。第五章より第九章に亘つては形態學說(Gestalt theory)を論じ凡そ百頁を費してゐる。こゝでは心理學と哲學との關係や教育學に心理學を應用する事を述べてゐる。第十章より十二章に亘つては、生命の調和に基礎せる此の著者の道德論が述べられて居り、千九百二十六年の帝國心理學會議に提出せられた顯着な論文の短評を試みてゐる論のすゝめかたは大體に於いて心理學的である。

著者の根本的立場は闡明にあらはされてゐるやうである。氏は心理學に於ける内省的方法と、心理學に於いては目的論的假

定の必要なことを信じてゐる、そこで彼の意見によれば無機物界は、根本的に無目的論的である。そうして彼は「生きて鼓動を感ずるあらゆる生存物の間の調和」に道德的理想のある事を信じてゐる。然しながら彼のかゝる意見を伺ふとき、獨斷論に墮するの嫌がある、尤も他に數多の著作を有する氏なれば何處かに氏の根本的立場を確立したと信じてゐるのかもしれないが尙讀みゆくうち、いらだゝしく感ずるのは、重要な點に來ると著者は「其の證據は何處かに擧げたが」式に確實な論據を避くる事である、詳細な論議を好まぬ趣もある。例すれば氏の云ふ所の「生命の調和」は精神的善が物質的善に遙かに優れてゐる事を要求することであつて其のよりどころは、物質善は決して共に享有を許さざるも精神善は常に共に享有せらるゝと云ふが如きである。

然しながら論文全體としては教えられるゝ所が多い。鉅致もいゝ。ゲスタルト學說の批判に於いては、明かにゲスタルトなる言葉は一義的でなく多義的にフォルムとして用ひらるゝ事を示してゐるやうである。(横川)

梅田雲濱遺稿並傳

青木 晦藏 共編
佐伯 仲藏

さきに伊藤蘭嶋の遺稿を内藤湖南氏等と共編せられし青木氏の第二次遺稿並傳著作としての梅田雲濱遺稿集は識者の期待のもとに漸く出版せられた。この書既に出づべくして其機を見なかつたが先年明治遺臣志士遺墨展覽會の京都博物館に開催さるゝや雲濱の書も展觀され近くは雲濱七十年祭を京都東山靈山に

於いて京都若州人會の發起により舉行せらるゝや青木、佐伯、内田の三氏相ばかり遺稿を蒐集考證し東奔西走斷簡零箋をもあます事なきを期せられたのである。該書は遺稿部(青木氏編)、傳部(佐伯氏編)の二部よりなり(雲濱肖像及詩文和歌手翰書畫その他にて六十五種の寫眞挿入)遺稿部には詩文和歌俳句、書翰遺墨、附錄、雲濱に關する詩文和歌琵琶歌及梅田信子(雲濱の先妻)遺詠、山田とみ子(雲濱の姪)一夕話を凡て五編の中に輯められ一讀情夫をしてたゞしむるの氣に溢れてゐる。傳部には雲濱の家系より年譜それに主項目をあぐれば學統、湖南塾時代、望楠軒時代、浪人僧者時代、勤王時代、殉難時代、歿後の赦免及光榮、墓碑の建立、家族、逸事、「妻臥病牀兒叫飢」の詩について、等の諸章よりなつてゐる。蓋し雲濱は文化十二年に生れ崎門學として有名な山口菅山の門に入つて學び其後江戸京都諸所に居を移して没年の安政六年四十五歳に至るまで殆ど心苦の絶間なく交遊せし人亦何れも愛國の士のみである。即書翰の今にのこれるを見るに梁川星巖、俗月性、笠華太、大高與左衛門、山口薰次等にして五十餘通、その他知名の士との交遊も頗る多い。青木氏の跋文に曰「徳川幕府の末に當つて王事につとむるもの其人少しとなさず、而も其功績の偉且大なるもの余首として雲濱梅田先生をおす、先生夙に崎門學を奉じ大義名分を明にし常に皇室の式徴を慨き幕府專横を憤り、首として勤王大義を倡す、天下の志士と謀り竊に策策するところあり青連院宮によつて以て九重に達し遂に安政戊午八月八日詔勅を見るに至る、而して幕府特に先生を目して勤王巨魁となす、首に逮

捕して以て獄に投ず先生其志をとげずして没すと雖も同志の士相踵いて起り、終に得て以て明治維新の鴻業を成す」と蓋し雲濱の愛國を思ふの念あつきを知るに足る當時雲濱の手蹟を藏するものは咸く忌諱を避けて殷滅燒燼十に一を存せざる有様にて蒐集の勞甚大と云はねばならぬ、雲濱の思想の客觀的價值については今こゝで沙汰すべき限りのものでないから以上内容の紹介にとゞむる。菊判美裝七〇〇頁、定價六圓送料二十四錢、東京神田區錦町一丁目有明堂書店發行。(北畠)

本邦古代氏姓の研究 故井上久米雄氏著

著者故井上文學士は東大國史學科を出で宮内省諸陵寮勤務の側ら大學院に於て研究に従事してゐられた篤學の士である。今回一週忌に際してその卒業論文を出版されたのが本書で三上參次博士の題簽、黑板、辻兩博士の師愛に満ちた序文を附してゐる。

本邦古代の氏姓に關する研究は、古來幾多の學者に依つて研究されたけれども、現存の資料があまりに乏しく爲に未だに異論區々としており、非常に難しい問題となつて殘されてゐる。著者は非常な努力を以てこの難問題の研究に當つたのであるが特にトーテミズムなる概念を以てこの氏姓の問題を再吟味しやうと企てた點が今迄の研究と異る所で、斷然群を抜いてゐる所以である。

即ち著者はこのトーテミズを基礎として本邦氏姓を觀察し、それを支那、朝鮮に於けるそれと關聯せしめて考へ、更に幾多

の具體的例證を示して、我國の文獻に遺された時代はクラント・テミズの時代から遠く離れてゐる爲に明瞭にこの時代を指摘し得ないけれども、猶かゝるトーテミズムの時代のあつたことを致へ得る痕跡は充分存することを主張してゐる。これが本書第一章本邦氏姓の胚種、第二章本邦氏姓の出現（附、支那の氏姓、朝鮮の氏骨）に述べられた大要であるが、著者は進んで第三章に初萌の氏姓混亂と其の糾正、第四章に聖德太子の國家思想と氏姓、第五章に大化改新と氏姓、第六章に天武朝の八姓制定の意義、第七章に新撰姓氏錄を中心として其前後の氏姓動態に就てその研究の結果を發表してゐる。即ちクラント・テミズムから出發した本邦氏姓が時代の遷移と共に混亂を來したので一度は聖德太子の國家思想に依つて整理され、ついで太子の精神を繼承した大化の改新に依つて新しい方向に導かれ、又天武朝の八姓制定となつた過程を攷察し、進んでその氏姓が、氏姓自身の持つ矛盾の爲に、その矛盾が擴大して種々の變化を來しついに中世社會を導き出す程過を説叙して結論としてゐるのである。

而して本書に盛られた研究には猶幾多の問題が残つてゐるのであつて、後人の研究を要する點も尠くないのであるが、辻博士もその序に「井上君のこの書は、その（氏族制度問題）解決の上に有力なる參考となり、後の學者に向つて大なる寄與となるであらう。」といつてゐられる如く氏姓研究又は本邦古代社會の研究には大いなる貢獻をなしたものと云ふ事が出來やう。著者の若さを以て此の難い研究をとにかくかくの如く一應整理づけ

得た事は又以てありし日如何に著者が倥傯であつたかを物語るもので、もし天が君に猶幾星霜の壽を惠んだとしたらば盡しその業蹟は大に見るべきものがあつたであらう。思ふてこゝに至れば實に悲痛な感に打たれる。猶本書はその兄君が愛弟を憶ふの切なる情からその生涯の力作たる本論文を上梓されたのであつて、兄君の慈愛溢るゝ跋文が附載せられてゐる。（非賣品）

〔石崎〕

編輯後記

◎ 吾々の悲歎は村上博士の突然の訃報である。博士の終生の念願は東洋佛教を、日本佛教と解放して世界佛教ならしめんとすることであつた。口は筆に其熱誠は一途に此大理想國建設であつた。今や其成果は著々實現へ向つてゐる。今や博士とは幽明を距てた。その悲みは吾々に取つて更に大きい。即ち博士は前本大學々長前本學會々長として純一の魂を抱いて老軀を擡げられたからである。博士の逝去は悲しいがその殘された大精神を吾人は體してそれが實現へ舊進せねばならない。三伏の暑候から準備にかゝつた特輯號も臘月中旬漸く凡ての校正を了へて、ひたすら發行の日を待つてゐる。

◎ 本年度特輯號は人文學研究室が中心となり、自然堀尾助手に色々御厄介をかけた、が併し人文學研究室の結晶として本號の記念さるゝ事は、まことに喜ばしい。それに付けても暑い折に御執筆下さつた諸先生に對しては謹んで深厚の謝意を呈する次第である。

◎ 來年度よりは發行數も二回増刊して年六回に、頁數も増加して大いに大谷學會の發展を期したいと思つてゐる。この際一人も多く愛讀して下さる事を願つて止まない。（北島）